

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	叙事詩Chanson de Rolandの異教徒について
Author(s)	信森, 広光
Citation	フランス文学 , 4・5 : 12 - 27
Issue Date	1963-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040851
Right	
Relation	



叙事詩 *Chanson de Roland* の異教徒について

信 森 広 光

I

8世紀のヨーロッパに実在し、君臨した著名なフランスの王, Charlemagne (<Ca-lemagne*) 大帝のスペイン遠征に纏わる伝説をうたった中世フランスの武勲詩の最も古いものとして算えられる *La Chanson de Roland* の研究は、従来しばしば行われてきた。しかしその焦点は殆んど常に華やかな騎士道の典型として、Roland (<Rol-lant) に向けられてきたきらいがある。しかるに当時スペインがアフリカから渡来した回教徒のモール人、即ちサラセン人が占拠していた模様をこの *La Chanson de Roland* の中から汲み取ることも中世フランスの叙事詩を特徴づけるものとして重要な課題の一つであるように思われる。そして、この権威者 Joseph Bédier の手によって編纂された中世フランス語によるテキスト (Manuscrit d'Oxford) を検討しながら、異教徒の取扱いを眺めて行こう。

先ず、この叙事詩 *La Chanson de Roland* を読んで感じることは、異教徒の集団がキリスト教徒の側と同様に完璧にしかも整然と組立てられていることにより、合理的観念を与えられる。更に1096年に始まった第1回十字軍の遠征後、時を経ないで書かれたであろう。この作品の中に十字軍やキリ

ストの聖墓やイエルサレムの聖地などに全く触れていないことも興味を与える。しかしかってイエルサレムを占領し、ソロモンの神殿を穢した経験者 Valdabrun (v. 156 6-67) 以外には東方の英雄達は誰も登場していない。

この叙事詩の場面はスペインであろう。しかもその行動は11世紀のモール人の占領地が舞台となっている。しかしこの詩の作者 (真の作者かどうかは問題である) は、この当時の顕著な特徴であった十字軍のキリスト教精神を導入し、スペインの異教徒には異端者の宿命を負わせている。この作品自体には種々な問題が伏在しているとしても、優れた詩人としてその技量を遺憾なく駆使して描く異教徒の姿は生々しく、特に戦乱が落ち着き優雅な芸術が栄え始めた11世紀のスペインに定着したモール人の女性型と、北アフリカ本国から君主の率いる援軍の勇猛な男性型との間に明瞭な区別を表現していることは独特である。この2種の異教徒を代表するのが、Marsilie 王であり Baligant 大王である。同じ神に仕える回教徒であっても、現地と本国との対照をまざまざと見せてくれる。従ってこの英雄詩は、異教徒を主体として見た場合、2部に分けられ、その頂点は勿論後編のサラセン

* 人名の綴字については、テキストに最も頻繁に現われたものを用いた。テキスト内にもこれらの綴字使用は不統一である。

軍の精鋭とフランス軍の選兵との正面衝突にあって、恐らく詩人 Tuoldus は Roland, の活躍と同様に、異教徒の理想像を生々しく描こうとしたのではなかろうか。しかし前編に登場する Marsilie 王にとっては、この戦いはあくまでも聖戦であって、Mahomet (<Mahumet) や Apollin を祈願することによって、たとえ戦死しても楽園の花束に囲まれて享楽と恍惚の約束という回教の教義は、その戦闘力を倍加し、キリスト教軍を脅かすものであると同時に、この信仰はある程度、キリスト教軍内にも浸透していて、死にたいする勇氣と法悦という騎士道精神が強くうちだされていることは、この詩において注意すべき点であろう。

事実、この叙事詩で相對峙する両陣營の描写には、宗教理念の相反する点を除けば、全く著しい類似性がみられる。例えばその陣容には Charlemagne にも Marsilie にも12名の騎士達を側近におき、大帝の王座は純金であり、異教の王のものは象牙である。フランスの騎士達は白い絹の敷物 *palies blancs* (v. 110)、スペイン側の領主達はアレキサンドリアの絹 *un palie alexandrin* (v. 408) の敷物に坐っている。敵軍への使者として騎士達が志願しても大帝はその危険を感じて拒絶する。(v. 250-51, 259, 273) 両君主とも《賢者》を傍らに侍らせ、大帝には Naime 公、王には Blancandrins が仕えていて、封建時代の慣習によって諸侯に相談する。Marsilie 王の側近には10人の家臣がいて、評定の後で登場する。即ち Blancandrins を始めとして, Balaguet の Clarin, Estamarin, Eudropin, Priamun, 鬚面の Guarlan, Machiner, そ

の伯父の Mahen, Joüner, 異人の Malbien らである。

しかし多くの共通点があっても、注意すれば根本的に微妙な相違があることに直ぐに気付く。即ち異教の王の目的の1つは、Charlemagne を自分の領地としている美しいスペインから追い出すことであり、大帝にとってはキリスト教の教義と威信をスペイン全土に敷くことである。Marsilie 王は戦いを好まず、平和的解決を望み、相談役 Blancandrins に意見を求める。その答えは、①最初から偽りの約束を為し、②東洋の富を法外に贈り(熊, ライオン, 犬, 70頭のラクダ, 100羽の鷹, 金銀を積んだ400頭の騾馬, 宝物を満載した50台の車), ③彼等自身の息子を含めた人質を出し、たとえその生命が犠牲になってもよい(v. 28-44) という全く途方もない計略である。これらの物資の供給によって Carles もその庸兵を満足させるという、11世紀頃の封建社会で盛んに行なわれた庸兵制度を作者は意図に組立てている。結局 *Chanson de Roland* の筋書は、この Valfunde 城の領主 Blancandrins によって決定されたのである。つまり、これもすべて大事の前の小事として強調する。

Asez est melz qu'il i perdent lé chefs
Que nus perduns l'onur ne la deinetet,
Ne nus seiuns cunduiz a mendeier!

(v, 44-46)

(たとえ、人質のもの達の首がはねられようとも/我々の自由が縛られ、領地をとられて、/乞食になることに比べれば、はるかにましだ!)

Asez est mielz qu'il i perdent les testes

Que nus perduns clere Espagne, la bele,
Ne nus aiuns les mals ne les suffraites!

(v. 58-60)

(たとえば、人質のもの達が首をはねられても、／この輝かしく、美しいスペインを失い、／多くの苦しみや難儀をうけるのに比べれば、はるかにましだ！)

彼は異教徒の間でも賢者として評判の高く、勇をもって鳴る立派な勇士であり、また思慮深い人として王のよき助言者でもあった。(v. 24-26) この提案の特異さも、異教徒にとっては所詮、大義名分の立つものであったし、キリスト教側の Ganelon (<Guenes) にとっても憎き Roland を倒すための都合よい口実であった。(v. 567-79) しかし或る程度の同情も Marsilie 王に感じないわけにはいかない。何故なら7年間も Carles 大帝はスペイン全土を荒廃し、都市を蹂躪してきたからである。王は使者 Ganelan に尋ねる。

Quant ert il mais recreanz d'osteier?

(v. 528, 543)

Quant ier il mais d'osteir recreant?

(v. 556)

(一体いつになったら彼は戦争に飽きるのだろうか?)

と3回にわたって Ganelon に尋ね Blancandrins 自身も Ganelon に「我が国に何を求めているのですか」(Que nus requert-ça en la nostre marche?) と Carles の意図を問う。

Marsilie 王は英雄的性格ではなく、事実、将来について不安であったし、自己の軍事力にも全く確信がもてなかった。

Jo nen ai ost qui bataille li dunne,
Ne n'ai tel gent ki la sue derumpet.

(v. 18-19)

(もはや戦いを挑むだけの軍備もなし、／たとえ戦うにしても、我々には彼らを破るだけの力もない。)

と嘆く。もし必要があれば、彼は40万の兵士を戦場に送ることができたが、確かに Marsilie のサラセン軍の構成は烏合の衆であったため、むしろ欺瞞で行動し、Charlemagne 軍の後衛2万に対して個別的に莫大な人海戦術で撃退しようと考えた。ムーアやサラセンの名称は、当時スペインの異教徒やベルベル人やレヴァント人を総称した用語であって、*La Chanson de Roland* におけるサラセンの12騎士も種々雑多である。即ち Marsilie 王の甥の Alroth, 王の弟 Falsaron, アフリカ王の Corsalis, Brigant の Malprimis, 譜代領主 Balaguez, Moriane 大守, Turteluse の Turgis, Valterne の Escremiz, 異人 Esturganz とその親友 Estramariz, Sibilie の Marganz, Mungre の Chernubles らが待機している。

これは *La Chanson de Roland* のベルベル人 (v. 885, 1236) を含めた ≪スペインのサラセン人≫の描写として優れている。彼らは Dathan と Abirun (v. 1215) 出身の Falsaron 公、雨が全く降らず何も成長しない悪魔の土地出身の巨大で強力な長髪人、“松やにとかして塗ったように黒い” Issi est neirs cume peiz ki est demise (v. 1474) 異人から“夏の花のように白い” Tant parert blancs cume flur en etest. (v. 3162) 種族に及ぶ千変万化の民族の集団であって、個人としては強力であっても、団体として

は統制のある戦士ではない。両軍の決戦にサラセン側はばたばた倒れ、先ず、3人の騎士は戦死し、残る騎士達も夫々一騎打に敗れ、ただ最後に Chernubles と Margariz だけが残る。20軍団を率いた Marsilie 王の攻撃が開始され、先頭の大將は Abisme で、サラセン軍きっての悪徳の塊りのような男、

Plus fel de lui n'out en sa cumpagnie.
Teches ad males e mult granz felonies;
.....
.....
Plus aimet il traisun e murdrrie
Qu'il ne fesist trestut l'or de Galice;
Unches nuls hom nel vit juer ne rire.
Vasselage ad e mult grant estultie.

(v. 1471-78)

(敵軍の間でも、この男以上の悪党はいない。)

極悪非道の札付き者で／……………
叛逆と殺戮を趣味とすることには／
ガリシアの黄金全部をもってしてもこれには及ばない程だ。／いつも黙っていて、一度も笑い遊ぶのを見た人はいない。／
しかも勇猛果敢で、傲慢この上ない男だ。)

この悪者を異教徒の典型として、しかもその強さを描くことも忘れない作者の意図がここに伺われる。このような異教徒軍の蝗のような大軍にキリスト教側の大僧正 Turpins はフランス軍兵士を勇気づける。即ち、

Que nuls prozdom malvaivement n'en chant.
Asez est mielz que moerium cumbatant.
Pramis nus est fin prendrun a itant,

Ultre cest jurn ne surum plus vivant;
Mais d'une chose vos soi jo ben guarant:
Seint pareis vos est abandonant;
As Innocenz vos en serez seant.

(v. 1517-23)

(後世のもの笑いのたねになってはいけない。)

戦って討死にした方がよほどましであろう。)

いずれにしても我々は遠からず全滅するだろう。)

いかに頑張っても我らの生命はもたない。／
しかしこれだけはしっかり憶えておいてほしい。)

我らは死ねば天国へ行く、必ず天国へ行けるということ。)

異教徒達は、もはや殉教や樂園の幻などの渴望の刺戟によって鼓舞された初期の熱狂的回教信仰を失って、むしろ逆にこの精神的基盤がキリスト教徒の側に移行した傾向が上例から汲みとれる。しかしサラセン軍の猛攻は繰返えされる。サラゴッサの町の半分をも領有している Elimborins や Alphaïen, Escababi ら7人のアラビアの騎士達が倒れても、引続き攻撃をかけてくる。海軍大將 Valdabrun, アフリカの Malquiant (Malcud 王の子), Grandonies (Cappadoce の王, Capuel の子) が登場して戦場を朱に染める。《Paiens s'en fuient》は、この詩の中によく出てくる句であって、彼らが死の恐怖のために、戦場を放棄するのではないことを意味している。

《E! car nos en fuiums!》

A icest mot tels .C. milie s'en vunt,
Ki ques rapelt, ja n'en retournerunt.

(v. 1910-12)

(そら逃げろ！／これを合図に10万の敵軍は戦場を棄てる、／呼んでも帰ってこないつもりようだ。)

この時代には、信仰と戦いとは密接な関係をもっていたために、Charlemagne 大帝のスペイン遠征も、その目的はキリスト教の布教であり、異教徒達がキリスト教を信仰さえすれば、戦いの目的は達せられたのである。この理論は更に飛躍して、礼拝堂でミサをあげることが神への奉仕であるとするなら、戦場で異教徒と戦うことも神への奉仕であり、宗教のためには如何なる戦争も許されることを意味するようになっていた。10万人が逃走する状況は大変なものである。この当時の戦場には露営のための幕舎が無く、当然捕虜は重要人物以外は収容されない習慣であった。Home ki ço set que je n'avrat prisun/ En tel bataill fait grant defension: (v. 1886-87) (このような戦いでは捕虜にはなれない、みな勇敢にも身を護る。)

Marsilie が Roland とのロンスヴォーの合戦で右手を失い、しかも息子の戦死を聞いて失望のあまりサラゴッサで死んでしまった。彼の妻 Bramimunde と2万以上のモール人が慟哭し悲歎に暮れた。彼らは Charlemagne と《France dulce》を呪うだけでなく、面白いことには、彼ら自身の神々をも罵った。

《E! malvais deus, por quei nus fais tel hunte?

Cest nostre rei por quei lessas cunfundre?

Ki mult te sert, malvais luer l'en dunes!》

(v. 2582-84)

(頼りない神よ、何んでこのような恥を与えたのか？／

我らの王の敗北を何んで見過したのか？／何んで忠誠な信者に報いないのか！)

神々の偶像を破壊しはじめる。かつての信仰の対象をかくも簡単に捨て去る様はすさまじい。

Puis si li tolent sun sceptre e as curune,
Par les mains le pendent sur une culumbe,

Entre lur piez a tere le resturent,

A granz bastuns le batent e defruisent;

E tervagan tolent sun escarbuncle

E Mahumet enz en un fosset butent

E porc e chen le mordent e defulent.

(v. 2585-91)

(偶像より笏杖と神冠を剥ぎとり、／台座を揺り動かして、／足もとに転がり落ちて、／棍棒で打ちまくり、粉碎してしまった。／またテルヴァガンの像からは紅玉をもぎとり、／マホメットの像も溝の中に投げ込んで、／豚や犬どもの咬むまま、踏みにじりにまかせた。)

このように Mahomet 直系の Apollin が最もひどい仕打を受けたことは注目に価するし、これが彼らに最も親しい神であったせいであろうことが容易に想像できる。

Mahomet が彼らの保護者 se Mahomet me voelt estre guarant (v. 868) として戦いの最中に呼び出され、崇拝されている事実を見ても、矢張り最高の神聖が Mahomet にあったとみてよい。

Mahumet levent en la plus halte tur.

N'i ad paien nel prit e ne l'aort. (v. 853-4)

(最高段の塔内にマホメットの像を安置し、／異教の軍勢は皆んなこれに祈願礼拝する。)

Marsilie 王は最初から呼びかけている。

Mahumet sert e Apollin reclimet:

Nes poet garder que mals ne l'i ateignet.

(v. 8-9)

(マホメットを拝み、アポリンに祈るような人間であるから、／所詮滅亡は免がれがたい。)

これらの実例は、当時の回教徒の神に対する概念や信条の解釈に大きな役割を果すものである。Koran は彼らにとって、常に神との同体の証拠であった。Mahomet が682年に歿したときも、狂信者達は彼は死んだのではなく、神聖な無幻境にあることを主張し、信仰者の前途に希望の光明を暗示した。しかしこの武勲詩の中からは、回教徒の神に対する信仰が、初期のものとはかなり変わった種類のものであることが伺われる。種々の Chanson-de-geste の群にも、この3人の異教の神々や偶像が現われてくるが、その性質や根拠については何んの説明も加えられていない。初期の武勲詩には教訓的な匂いが強く、武勲詩の系譜を伝えるようで興味深い。この詩人は Mahomet を適切な場所に置き異教徒達を拜ませている。即ち Mahumet levant en la plus halte tur:／N'i ad paien nel prit e ne l'aort. (v. 853-4).

この詩には、Tervagan に関する詳述は見られないが、その根拠は各武勲詩に求めれば、結局 *La Chanson de Roland* における人の神々の伝統は生き生きした異教の神の三位一体の観念を合理的に大衆化したも

のであると推測できる。即ち笏杖と神冠をもつ Apollin, 輝やく紅玉をもった Tervagan, 及びサラセン人の保護者である Mahomet たちで、各神とも象徴として偶像をもっている。この伝統とスタイルは後の中世フランス詩に継承され、時には4人目の神をも加えて構成されている。

Turoldus によって描かれている異教徒の姿の特色は、その神々の描写と同様に活潑であり、鮮明である。ある者は伝説的、幻想的であり、他の者は初期の史書にみられる実在の人物である。彼らは冷性であり、特に Sibilic の Margariz は美男の容貌をもち、

Pur sa beltet dames li sunt amies:

Cele nel veit vers lui ne s'esclargisset;

Quant ele le veit, ne poet muer ne riet;

(v. 957-9)

(美男の誉れ高く、多くの女性に好かれ、／その顔を見て、顔を赤らめ、／その面をみて、ほほ笑みかけない女はないという。)

またサラセン軍勢の出陣のいで立ちが極めて華麗である。

Paien s'adubent des osbercs sarazineis,

Tuit li plusur en sunt dublez en treis.

Lacent lor elmes mult bons, sarraguzeis,

Caignent espees de l'acer vianeis;

Escuz unt genz, espiez valentineis;

E gunfanuns blancs e blois e vermeilz.

Laissent les muls e tuz les palefreiz,

Es destres muntent, si chevalchent estreiz.

Clers fut li jurz e belz fut li soleilz:

N'unt guarnement que fut ne reflambeit. (v. 994-1003)

(異教の軍勢はサラセン作りの鎖鎧を身に
つけ、/
殆んどは3枚重ねのものである。/
サラゴッサ製の頑丈な鎧の緒をしめ、/
ヴェンナ鍛えの劔を帯び、/
見事な楯をもち、ヴァレンシアの槍をかか
えている。/
吹き流しは、白、藍、赤と色とりどり、/
驟馬、飾り馬は乗り替えて、/
軍馬に跨がり、競って乗り出す。/
空は晴れて、陽は燦然と照りつける。/
日に輝やき、煌々として照り映える。)

キリスト教徒にとって常に羨望の的であつた美しいアラビア馬に跨って進軍する様は、まさに立派な騎士姿であつたであろう。また、妖術にすぐれた男もいて、ヅピテルの魔法に乗って地獄詣でをして来たものもいる *L'encanteür ki ja fut en enfer:/ Par artimal l'i cundoist Jupiter.*

(v. 1391-2).

勇敢なバラグエを領有する将軍については、作者も特に注釈を加えている。即ち

*Cors ad mult gent e le vis fier e cler;
Puis que il est sur sun cheval muntet,
Mult se fait fiers de ses armes porter;
De vasselage est il ben alosoez;
Fust chrestiens, asez ouïst barrnet.*

(v. 895-99)

(身体つきは優美で、顔は凛々しく清く、/
一度馬上の人となれば、颯爽たる姿だ。/
もとより武勇の誉れは高く、/
もし彼がキリスト教徒であれば、/
さぞ立派な騎士であろうに)

純粋な正統派の回教徒であるトルトロース

の Turgis は

《*Ne vos esmaiez unches!*

*Plus valt Mahum que seint Perre de Ru-
me:*

Se lui servez, l'onur del camp ert nostre.

(v. 920-2)

(御心配には及びません！／ローマの聖ピエールなんかマホメット様と比べれば月とすっぽん！／マホメット様にお仕えさえすれば勝利は間違いないんだ。)

この神への信頼にも拘らず、Mahomet は回教徒達を余りにも無惨に失望させた。彼らの魂はサタンの悪魔によって地獄へとおとされたのである *L'anme de lui en portet Sathanas.* (v. 1268).

詩人 Tuoldus が異教徒を見るのが因襲的な見方をしていたことと、当時の教会側の通念によって影響を受けていることは上記の事柄より明白である。この傾向は特に *La Chanson de Roland* の初めの箇所 to 顕著であり、登場人物の描写にその一貫性を示している。

しかし Roland の死後 (2396), Baligant の登場によって、ありのままの異教徒の姿がみられることは非常な興味を与える。

II

異教徒の面目と真価は、この後半に入つて判然となり、Tuoldus の筆致によって、精彩を極めてくる。

ロンスヴォーの戦いに敗北した Marsilie 王の親書が、彼の君主バビロンの Baligant に援軍を派遣するようにと送られた。(v. 2614) Baligant は驚くなかれ、ヴェルギウスよりもホメロスよりも年老いた異教の王

者で、マホメット直系の子孫として回教徒の間で最高の権力をもっていた。(v. 2615-16) 手紙にもられた警告は、

En Sarraguçe alt sucurre li ber
E, s'il nel fait, il guerpirat ses deus
E tuz ses ydeles que il soelt adorer,
Si recevrat seinte chrestientet,
A Charlemagne se vuldrat acorder.

(v. 2617-21)

(急遽サラゴッサに救援に来てくれ、もし来なければ、今迄礼拝していた／神々や、その神像を放棄して／キリストの神聖な教えに服し、シャルマーニュと和睦するつもりだ。)

かくも信仰が全く簡単に置換できるものであろうか。いかに当時のスペインの宗教心が薄弱になっていたかが理解できる。とにかく、Baligant は急遽北アフリカに巨大な軍勢と各種船舶を集めて、アレキサンドリアの港から5月の初夏に大船団を出航さす。(v. 2623-29) その航海の有様は素晴らしく、詩人の妙えなる筆捌きはさえてくる。

Cranz sunt les oz de cele gent averse;
Siglent a fort e nagent e gouvernement.
En sum cez maz e en cez haltes varnes
Asez i ad carbuncles e lanternes;
La sus amunt pargetent tel luiserne
Par la noit la mer en est plus bele,
E cum il vienent en Espagne la tere,
Tut li país en reluist e esclairet.

(v. 2630-37)

(敵の船団は堂々としている。帆に風をいっぱいはらませ、／

櫂を漕ぎ、錨をとり勇ましく海を渡る。／帆柱の頂きと、艦の高いところには／多くの柘榴石と、灯火をかかっている。／高くから明りが煌々と照らせば、夜中だというに、海は昼よりも美しい。／スペインの陸に近づけば、／岸一面にあかあかと照らし全く明るい。)

やがてスペインに着くが、碇泊する暇がない。海から河口に入り、マルブローズからマルブリーズを至て、セーブル河に至る。灯火や柘榴石が燦然と輝やけば、夜中であっても河の水面をくっきりと浮彫に照らす。やがて夜明とともにサラゴッサに到着する。

かくしてキリスト教 Charlemagne 大帝と回教を守る Baligant 大王との一大決戦の日が近づくのである、Baligant の側には Espaneliz と17人の王達が寄添い、Clarifan と Clarien が使者として Marsilie 王のもとへと出発する。使者達がサラゴッサに辿り着き、宮殿へと町を通過するとき、騒音を聞き、多くの異教徒達が泣き叫び、慟哭している有様を見た。これは破壊された異教の神々、Tervagant, Mahomet, Apollin の無力とを非難する声であった。使者達は懇懇な態度で、3人の神々の名の下に場違いの挨拶、《Cil Mahumet ki nus ad en baille, / E Tervagan e Apollin, nostre sire, / Salvant le rei e guardent la reïne!》(v. 2711-13) を述べたとき、Bramimunde は憤然として捨鉢に答える。

《Or oi mult grant folie!

Cist nostre deu sunt en recreantise.
En Rencesval malvaises vertuz firent:
Noz cheralers i unt lesset ocire;

Cest mien seigneur en bataille faillirent;
Le destre poign ad perdu, n'en ad mie,
.....
.....

Que devendrai, dulruse, caitive?
E! lasse, que nen ai un hume ki ne m'oci-
et!《(v. 2714-23)

(これはまた何んという愚かな御挨拶! /
我らの神々は裏切り者です。 /

ロンスヴォーでは何んら威信を示すことも
できずに /

味方の騎士をむざむざと戦死させました。 /
私の君も戦いに敗れ、 / しかも右の拳を失
くされました。 /

情けないことよ、憐れな私は一体どうなる
んでしょう。 / いっそのこと一思いに殺し
てくれる人はいないものかしら。)

彼女にとっては無理のない気持であり、し
かも金髪の Jurfalen 王子も戦死した今と
なっては希望がない。使者の Clarien は
「もう黙りなさい、お妃様」《Dame, ne
parlez mie itant! (v. 2724) となだめて、
Baligant 大王の戦略を説明する。

この後に登場するアラブ人には注意する
価値がある。アラビアの異教徒軍は軍船か
ら降り立った Païen d'Arabe des nefes se
sunt eissut, (v. 2810)。当時のアラビア人は
優秀な戦士であり、回教軍の中でも最右翼
であった。アラブの駿馬や騾馬に跨り、騎
兵としては神技を示すほどであった。Ba-
ligant は忠臣の Gemalfin と4人の大將軍
を伴ってサラゴッサへと飛ばす。Marsilie
王と Bramimunde に会ってから、先駆け
て行く。その先陣は大帝にまみえて Bali-

gant の名で戦宣告をする。(v. 2978-81)
白馬に跨がる Charlemagne は、キリスト
教軍10万騎を見わたしてから駆け出し、事
の重大さを悟り、神とローマの使徒の御名
を唱える Recleimet Deu e l'apostle de Ro-
me. (v. 2998)。しかし大帝の心は、もう一
つの苦渋と難儀があった、つまり Roland
なき後、かつて征服した Seisne 人, Hun-
gre 人, Bugre 人, Romain 人, Puillain 人, Pa-
lerne 人, Affrike 人, Caliiferne 人らが叛旗
を翻えすかも知れない憂慮であった。(v. 2
921-24)

Baligant は軍馬に跨り、その雄姿は堂々と
し荘麗であった。

La forcheüre ad asez grant li ber,
Graisles les flancs e larges les costez;
Gros ad le piz, belement est mollet,
Lees les espalles e le vis ad mult cler,
Fier le visage, le chef recercelet,
Tant par ert blancs cume flur en estet;
(v. 3157-62)

(素股はとても広く。 / 脾腹は細く、肋は
張り、 / 胸は頑丈で肉が隆々とし、 / 肩骨は
逞しく、血色は明るく、 / 不敵な面魂に頭
髪は渦巻き、 / 夏の花のように白い。)

百戦練磨の勇士である彼が、もしキリス
ト教徒であれば、さぞかし誉れ高い武将で
あるのに! De vasselage est suvent espro-
vet; / Deus! quel baron, s'oüst chrestien-
tet! (v. 3163-4) と作者は残念がる。彼の
馬術の素養も素晴らしく、軍馬を駆って幅
50尺もある濠を一跳びに乗り越える技量に
異教徒達は鼓舞される。詩人は、フランス
軍の構成を描写した後に、対照的にサラセ

ン軍の組織を示す。これは混成軍団で成
立ってはいたが、強力なものであった。その
出身地は地理的に明瞭なものもあるが、伝
説的或は詩人の創作によるものも多い。智
将 Baligant は雄々しい武将であると同時に
に教養の高い人でもあった。彼は直ちに30
軍団 escheles の部隊編成を、Torleus 王と
Dapamort 王に命じる。即ち、

- (A) ① Butentrot 人
② 頭の大きい Micenes 人
③ Nubles と Blos 人
④ Bruns 人と Esclavoz 人
⑤ Sorbres 人と Sorz 人
⑥ Ermines 人と Mors 人
⑦ Jericho 人
⑧ Nigres 人
⑨ Gros 人
⑩ Balide 人
- (B) ① Val Fuit の Canelius 人
② Turcs 人
③ Pers 人
④ Pinceneis 人
⑤ Solteras 人と Avers 人
⑥ Ormaleus 人と Eugiez 人
⑦ Samuel 人
⑧ Bruise 人
⑨ Clavers 人
⑩ Occian 人
- (C) ① Malprose の巨人

- ② Hums 人
③ Hungres 人
④ Baldise 人
⑤ Val Penuse 人
⑥ Maruse 人
⑦ Leus Astrimonies 人
⑧ Argoilles 人
⑨ Clarbone 人
⑩ Fronde 人

以上がフランスの年代記☆に書き示され
ている名前である。Geste Francor. XXX.
escheles i numbrent. (v. 3262).

異教の大王は、先頭に龍印の旗を立て、
Tervagan と Mahomet の神旗を打つ立て、
邪神 Apollin の偶像を高々とかかげて進軍
する。Dedarant sei fait porter sun dragon.
/ E l'estandart Tervagan e Mahum
/ E un'ymagene Apolin le felun. (v. 3266-
68). 智略に長けた Baligant は、Li ami-
ralz est mult de grant savier: (v. 3281). 優
秀な精鋭3個軍団即ち①トルコ軍、②オル
マレー軍、③マルブレーの巨人軍を待機さ
せ、オクシアンの部隊を自ら率いて進む。
これら軍勢の中でも、トルコ軍が最強を
誇っていた。明らかに Tuoldus は、当時の
トルコ人の剛勇さを認めていたことが理解
できる。雲霞の如き敵味方の大軍が美しく
隊伍を整えて接近する。両軍の間には、遮
ぎる山も谷も丘もなく、森も林もない平原

☆ この「年代記」については、作者はしばしば引合に出している。即ち

- (1) Il est escrit en la Geste Francor (v. 1443)
(2) Il est escrit es cartes e es brefs, / Ço dit la Geste, plus de. III. milliers.
(v. 1684-5)
(3) Ço dit la Geste e cil ki el camp fut: (v. 2095)
(4) En plusurs gestes de lui sunt granz honors. (v. 3181)
(5) Il est escrit en l'ancienne geste (v. 3742) などである。

の真只中で遭遇する。オルフェルヌの Am-borres が Baligant の旗を高々とかかげて突撃する。フロルデーの王 Canabeus, ペルシア王 Torleu, Malpramis らは殉教の神冠を天国で受けるために数多くのフランス軍と勇敢に戦った。戦いは熾烈を極め Baligant は味方の全軍将士を励まし、「戦いに勝ちさえすれば、美しく気高い姫でも国でも領地でも何んでも与える」という。

Jo vos durrai mullers gentes e beles, / Si vos durai feus e honors e teres. (v. 3398-9). 異教徒達は元気百倍する。さすがに Baligant は強い。フランス軍の将軍 Guineman, Gebuin, Lorant, Richart らを打ち倒し、アラビア, オクシアン, アルゴイユ, バルクルら鬼の如き軍勢が猛烈に攻めたてる。フランスとアラビアの両軍はここを先途と乱れ戦う Mult ben i fierent Fran-ceis e Arrabit. (v. 3481). この詩人の言葉はそのすさまじさを伝える。即ち

De grant dulor li poiüst suvenir!
Ceste bataille est mult fort a souffrir.
(v. 3488-9)

(その惨状は決して忘れられない! / 全く耐えがたき戦いだ、)

異教の大王は、その神々 Apollin, Ter-vagant, Mahomet の名を呼んで、戦いに勝利を授けてくれれば、純金の神像を造り奉ることを誓う《Mi damnedeu, jo vos ai mult servit: / Tutes tes ymagenes ferai d'or fin (v. 3492-3). このとき、Baligant は子息 Malpramis と弟 Canabeus の戦死の報を聞いて、兜を傾けて、首をうなだれ、まさに息も絶えんばかりに悲しむ。この頃

では、親子の情愛はフランス人のものよりもアラビア人の方が強かったように思われる。この場にのぞんで彼は悲しみの大きさに自信を失い始めた自分に気付き、早速異国人の予言者 Jangleu を召して、戦いの成行を問い質す。予言者の返答は卒直で絶望的であるが、一抹の血路がないこともなかった。つまり

Morz estes. Baligant!
Ja vostre deu ne vos erent guarant.
Carles est fiers e si hume vaillant;
Unc ne vi gent ki si fust cumbatant.
Mais reclamez les barons d'Occiant,
Turks e Enfruns, Arabiz e Jaianz.
Ço qu'estre en deit, ne l'alez demuramt.
(v. 3513-19)

(バリガン大王には、生命が危いです。/ 陛下の神々はもうあなたをお護りにならないでしょう。/ シャルルは威勢よく勇敢で、/ これほど堂々と戦う軍勢は未だ見たことがありません。/ しかしオクシアン, トルコ, アンフロン, / アラビア, 及び巨人軍を呼んで、/ 全力をあげて、遅れをとってはいけません。)

もはや生命も危く、日頃の神々は当てにならない。もはや今となっては予言者の忠告も役立たない。大王は山楂子の花の如き、白髯を鎧の外に出して、いかなる事態になっても動じない覚悟をきめる。彼は馬のいななき声を出すオクシアン勢、犬の吠声をするアルゴイ人の軍勢を集めて敵陣へ突入する。しかしフランス軍の反撃によって龍旗をもつ Ambure は倒れ、自分の龍印の王旗もろとも地に落ち、Mahomet 聖幡が泥まみれになるのを見た Baligant は形勢

の不利を知り、神の加護が Carles の側にあることを悟る *Li amiralz alques s'en aperceit / Que il ad tort e Carlemagnes dreit. / Paien d'Arabe ...* (v. 3553-55). この出来事は、アラブ人にとっては常に敗北を意味する兆と考えられていたものであった。いよいよ Baligant は意を決し、Carles との一騎打となる。これはアラビア軍とフランス軍の勝敗を決する天王山であり、回教とキリスト教の宗教上の対決であった。この箇所は *La Chanson de Roland* のクライマックスがみられるのである。両者とも剛勇の士であり互いに鬨の声をあげることを忘れない。異教の大王が「プレシユーズ」《*Preciuse!*》と叫べば、Carles は「モンジョワ」《*Munjoie!*》と答える。この天にも響く雄叫びに、相互にその所在を知り、まさに龍虎相打っ息づまる一騎打が展開する。正剣と邪剣とが交互に振られ、いずれか片方が倒れるまでは、休むことを知らない。(v. 3568-88) 2つの宗教を代表する両雄の興亡を賭しての決闘はすさまじい限りである。両者は互いに牽制し合って、会話が始まる。Baligant の言葉は悲愴的である。

《Carles, kar te purpenses,
Si pren cunseill que vers mei re repentés!
Mort as mun filz, par le men esciente;
A mult grant tort mun país me calenges.
Deven mes hom [en fedeltet voeill rendre]
Ven mei servir d'ici qu'en Oriente.》
(v. 3589-94)

(シャルルよ、よく反省しろ、/
後悔して詫びよ/
我が子を討ったのは汝だな、/

我が国土に戦いを挑むとは何んたる非道だ。/

我が臣下となれば、領地をやろう。/
東方まで来て我に仕えよ)

Carles の答えは断固としている。
《*Mult grant viltet me semblet:*
Pais ne amor ne dei a paien rendre.
Receif la lei que Deus nos apresentet,
Chrestientet, e pui t'amerai semples;
Puis serf e crei le rei omnipotente.》
(v. 3595-99)

(つまらぬことを言うな、/
異教の者に施す情けも平和もないわ、/
我らの神の教え、/
キリスト教を受け容れれば直ぐにも和睦をもとうぞ。/
全能の王を崇め信仰せよ。)

Carles は決して自己の使命を忘れていないが、彼の言葉は空しく、再び一騎打が始められた。大王は、大帝の褐色に輝く鉄兜めがけて強く斬りつけ、兜は裂け、肉片を少しく切り落し、Carles は少々よろめき、今にも倒れそうになったとき、神の加護によって天使 *Seint Gabriel* が声をかける。これを聞いて勇気と正気を取戻して、異教の大王に斬りつけると、宝石をちりばめた兜を砕き、Baligant に致命的打撃を与える。(v. 3619) キリスト教軍の勝利を告げる叫び声があがり、大王を失った、異教徒軍は、もはや戦意もなく敗退する。これが神の思し召しであり、*cum Damnesdeus le volt.* (v. 3625)、この戦いは異教徒の逃走で終わったのである。一方、サラゴッサの町では *Braminunde* は高い塔で神が常に憎む邪教の僧侶達を侍べらせて、アラビア軍の敗走の情景を見て叫ぶ。

《Aiez nos, Mahum!

E! gentilz reis, ja sunt vencuz noz humes,
Li amiralz ocis a si grant hunte!》

(v. 3641-3)

(ああ！マホメットよ！

助け給え！／＼

ああ優しき王よ、味方は敗れましたよ、！
大王さまにはあえない最後をとげられました！)

この知らせは傷心の Marsilie にとっては余りにもひどかった。これを聞くや壁に顔を向けて、涙を流し、罪深く無念のまま死に果てた。そしてその魂は悪魔の手に渡った。

L'anme de lui as vifs diables dundet. (v. 3647). かくて正義の側が勝利をおさめ、作者は敬虔に詩句を結ぶ。「神明の加護をもて戦うものは、すべて成就する」と Mult ben espleitet qui Damnesdeus aiuet. (v. 3657). 大帝はサラゴツサを占領し、町中のユダヤ教会や回教寺院を搜索させて、凡ゆる画像を鉄槌や斧で粉碎し、呪いや妖術の証拠は消失してしまった。神を信じ、神を崇む Carles の心によって10万余人の異教徒は強制的に洗礼をうけ、拒絶する者は処刑された。しかし Bramimunde 妃だけが洗礼を拒否したため、捕虜としてフランスへ連れ行き、平和的に改宗させようと試みられる。

ここで *La Chanson de Roland* の第2部が終る。第1部 (Roland の死まで) は、登場人物の説明であって、なかでも最も極悪な罪は Carles の部下の裏切り行為であった。第2部では、その主人公は Baligant という価値ある好敵手であった。もし Carles

に神の味方がなかったとしたら、Baligantの方が勝利を収めたかもしれない。その実力においては Carles 以上であったであろう。第3部 (Ganelon の処刑) に入ってから、もはや異教の登場をみない。僅かな蛇足として Bramimunde がエックスの洗礼池で信心深い名門の貴婦人達に付添われて改宗し、その名も Julienne と改め、真のキリスト教徒となつたくだりで終る。(v. 3978-87) しかし最後の laisse (291) に注目する箇所がある。即ち Carles は天使 Gabriel の命によって、異教徒に包囲されたインフの町の Vivien 王を救援するため、ビールの地まで息つく暇もなく、再び遠征しなければならぬことを、Carles は眼に涙を浮かべ、白髯をしごきながら嘆く。即ち「とにかく、苦勞の多い我が生涯だ」《Deus, si penuse est ma vie!》(v. 4000). 何故なら今迄の行動は全くスペインにのみ限られていたからである。キリスト教のためには、彼は何処までも行かねばならない運命を背負っている。もし Tuoldus がもう1つの詩を書いていたとすれば、更に興味あるものであろうことが想像できる。

またキリスト教に改宗された女性が宗教理念の相反する両陣営の間の平和のはしわたしとなつて、この叙事詩が終っていることも、詩的奇縁を感じないわけにはいかない。彼女は夫の死までは、貞節な妻であったし、この叙事詩のコンテキストで知る限りでは、回教徒の Marsilie 王ただ一人の妻であったことは注意に値する。Carles はサラセン女王のエキゾティックな美しさに魅かれたのであろうか。また彼女は、サラセン宮廷に叛逆の知慧をもたらした騎士 Ganelon に感動したのであろうか。とにかく

く、彼女は非常に高価な2個の首環を持ち帰るよう彼に贈った。それは黄金と紫水晶と風信の玉で出来ており、ローマの凡ゆる富も及ばぬほどの価値のものであった。(v. 637-9) Carles 大帝さえ、未だ持ったこともないような東洋の目くらむばかりの財宝は当時の西欧の地味な兵士達には大きな魅力であったに違いない。

この叙事詩の中では集団としての異教徒に対するキリスト教徒の態度はあまり同情的ではない。中世の騎士道は廃れ、十字軍の初め頃の記録文書と当時の武勲詩の初期の作品を考えてみても、異教の敵に対するキリスト教徒の騎士が示した中世の騎士道は稍々すたれかかっている。異教徒は絶えず悪者であり、滅ぼされるためにのみ創り出されているようなものである。しかし例外的に、キリスト教徒であったならば、雄々しく立派な貴族であったであろう場合には、特別扱いされている。その騎士道はこの地上に異教の芽を出さないようにと、無防備で横たわっている傷兵をも殺す行為が認められていた時代なのである。いずれにしても、総括的には当時の記録文書や初期の武勲詩には、キリスト教徒も異教徒と同様に、野蛮な行動をとり、いや時にはもっと残酷なものであった事実を証明している。キリスト教徒の理想像として描かれている Carles の人格も、あの場合には批評される面もあり、逆に異教徒の行動を賞賛するよう際立たせる箇所さえみられる。

この頃からキリスト教徒と異教徒の間の騎士道に、女性に対する礼節の跡が、この *La Chanson de Roland* を初めとして初期の英雄詩に辿ることができる。この特徴は12世紀の間に発展し、やがては叙事詩そのもの

の性格を大巾に変え、初期の男性的叙事詩を宮廷ロマンスへと展開して行ったのである。

最後に、数理的に統計を出してみても、作者の異教徒に対する取扱いの意向を結論してみよう。作者が異教徒の描写に費やした詩節 *laisse* が全体の291節中、148節もあり、丁度半分強の割合を占めている。ここに異教徒とキリスト教徒を同等に描写し“力の均衡”によって両者の葛藤を激烈なものに仕立てようとした手法が伺える。異教軍が強ければ強い程キリスト教軍の描写に張合いがあり、そして最後の勝利という華かな幕切れが、この作品を益々価値づけているのではなかろうか。

この意味から異教軍の内訳を検討してみると、

- (1) 純粹に異教徒のみを描写したもの：52節
- (2) 異教徒とキリスト教徒と一緒に現われていて、
 - Ⓐ 異教徒を主体的に描いたもの：27節
 - Ⓑ キリスト教徒を主体にしたもの：24節
- (3) その他が純粹にキリスト教徒のみのもので、143節中殆んどが Roland, Carles, Ganelon に費やされている。

しかもこれらのパーセンテージは、

A 全詩篇291節中、

- | | | |
|---------|---|-----------|
| (1) のもの | : | 17.86% |
| (2) のもの | : | a) 24.77% |
| | | b) 8.24% |
| (3) のもの | : | 49.14% |

B 異教徒関係の詩節148節中、

- | | | |
|---------|---|-----------|
| (1) のもの | : | 35.13% |
| (2) のもの | : | a) 48.64% |

b) 16.21%

という率になっている。

更に特徴づけるものとして、異教徒が集中的に現われている箇所を調べてみると、

- (1) 2→7, (Blancandrins の独壇場—計略)

69→78, (Marsilie の Roland への攻撃準備—領主達の武者振るい)

187→202, (真打 Baligant の登場—進軍)

228→234, (Baligant の戦いの雄姿—その軍団編成の妙)

- (2) a) 37→42, (Marsilie と Ganelon の交渉—掛引き)

46→50, (Ganelon と約束—握手)

93→108, (Marsilie の領主達と Roland 達の決戦—敗北)

112→ (とびとび) 125, (Marsilie と Roland 第2回戦—勝利)

142—145, (Marsilie の右拳, 王子の戦死—突撃)

235→ (とびとび) 241, (Baligant の攻撃—活躍)

257→262, (Baligant と Carles の一騎打—戦死)

b) 29→ (とびとび) 36, (Blancandrins と Ganelon の取引—成功)

以上の事柄から、異教徒の主役が常に Blancandrins, Marsilie, Baligant らであったことが理解できる。

このように *La Chanson de Roland* において、果している異教徒の役割は、目覚しいものであり、その巧妙な Tuoldus の筆は多少の誇張はあっても、異教徒の真骨頂を

ありのままに伝え、しかも登場する状況と場所に応じて適宜の性格を各様に個性づけ、すべての異教徒が同型でないことを強調していることも、この叙事詩を価値づけ、作者の技量の評価を高めるものである。そして更に特筆すべきことは、もしこの *La Chanson de Roland* がなかったとしたら、イタリア・ルネサンス文学の花を咲かせた Boiardo や Aristo の叙事詩、*Orlando Innamorato* と *Orlando Furioso* の存在を期待することは到底できなかつたであろう。(1962年9月)

《参考書目》

- (1) M. Delbouille; Sur la genèse de la Chanson de Roland, Palais des Académies, Bruxelles, 1954.
- (2) P. Boissonnade; Du nouveau sur la Chanson de Roland, Librairie Ancienne Honoré Champion, Paris, 1923.
- (3) D. McMillan; La Chanson de Guillaume, Éditions A. & J. Picard & Cie., Paris, 1950.
- (4) G.R. de Lage; Introduction à l'ancien français, Société d'édition d'enseignement supérieur, Paris, 1959.
- (5) L. Foulet; Petite syntaxe de l'ancien français, Librairie Honoré Champion, Paris, 1958.
- (6) J. Anglade; Grammaire élémentaire de l'ancien français, Librairie Armand Colin, Paris, 1958.
- (7) S. Ullmann; Précis de sémantique française, Édition A. Francke, Berne, 1952.
- (8) F. Brunot & C. Bruneau; Précis de

grammaire historique de la langue française, Masson & Cie, Paris, 1956.

A propos des Païens dans la *Chanson de Roland*

En ce qui concerne la façon dont les Païens sont envisagés dans la Chanson de Roland, on relève ce caractère étonnant, à savoir qu'un groupe, appartenant à l'armée païenne, est systématiquement décrit avec les mêmes traits que les chrétiens. Parmi les païens il faut distinguer entre un type féminin, en Espagne, et type masculin en Afrique que représentent Marsilie et Baligant. Du point de vue païen, il peut être divisé en deux parties et l'accent principal est placé sur la seconde partie où apparaît Baligant. Il semble que Tuoldus se soit efforcé de décrire les païens avec sympathie et vivacité comme des types idéaux à l'image de Roland. Il est curieux de noter que la doctrine musulmane et la foi en Mahomet, Appolin et Tervagan, s'affaiblirent; vaincus à la guerre ils ont non seulement maudit Charlamagne et la "douce France" mais encore abusé de leurs dieux et souillé leur statue. Il est surprenant de les voir s'écarter si facilement de leurs dieux qui furent auparavant un symbole et un objet de respect. La tendance de Tuoldus à les traiter conventionnellement, influencé par l'Eglise chrétienne de son temps, est surtout notable dans les passages de la première partie. Les échantillons de la seconde partie sont dignes d'intérêt en ce qui concerne les arabes, représentés comme de courageux guerriers dans l'armée musulmane. Dans cette épopée l'auteur a peu de sympathie pour les païens envisagés comme un groupe, par contre, elle est considérable quand il s'agit d'individus isolés. Bien que les païens soient toujours considérés comme des démons dignes d'être détruits, s'ils avaient été chrétiens, ils auraient été des généraux honorables et courageux.

Cette attitude, compatissante et pathétique à l'égard des païens nous conduit à la conclusion que Tuoldus doit avoir une ascendance païenne dans la région des pyrénées ou semble avoir eu des rapports avec des païens qui par la suite se convertirent au Christianisme.

Il est intéressant de noter ci-dessous les données statistiques du texte: sur un total de 291 lais, 148 sont consacrés aux païens. c'est à dire qu'ils sont plus nombreux que ceux consacrés aux chrétiens.

sujet	Nombre de lais	pourcentage par rapport au total	Pourcentage par rapport au total des lais païens
1. Entièrement païens	52	17.8	35.1
2. Mixtes (Païens-chrétiens)			
a) en majorité païens	72	24.8	48.6
b) en majorité chrétiens	24	8.2	16.2
3. Purement chrétiens	143	49.1	—